



複式簿記から三式簿記へ

(1月のごあいさつ)

平成 23 年 12 月 29 日 (木)

新年おめでとうございます。

冬至から 10 日間は特別寒いという記事を中国の雑誌で読んだような気がします。沖縄の最も寒い時期は、旧暦のムーチービーサー（鬼餅寒）と言って今年は冬至から 10 日目の正月元旦に当たります。

最近、琉球大学名誉教授の豊岡隆先生から二冊の本をいただいた。読み始めて読み終るまでその斬新な考え方に驚かされると同時に、今一度じっくりと読んでいくところである。その書物はアメリカ会計学会の会長もされた井尻雄士先生著の「三式簿記の研究」と「利速会計入門」である。

読み進むにつれて、今まで学び実行してきた複式簿記は絶対完全な計算体系と思って来たが、それほど完全なものではなく、まだまだ改善と発展の余地があるのではないか。ある意味では 500 年もの間、発展が無かったとも言えるのではないか、というショックを受けた。

複式簿記は目に見える借方と目に見えない貸方という二つの次元をもっている。借方には現在の財産（資産 - 負債）を置き、貸方ではその財産を形成してきた過去の損益の説明（資本形成過程）を行う計算体系の中で様々な経営価値を生む。要するに、複式簿記は現在とそれをもたらした過去を扱う二次元の世界である。現在を中心において考え、過去の積分のような現在があれば、現在の微分のような未来がある筈である。その未来が三次元の世界であり、それを複式簿記に加える、そこまで発展して三式簿記になるというのである。複式簿記でいう現在とは貸借対照表であり、過去とは損益計算書である。過去の損益が形成する現在の財産に至るまでの財務的な分析や過去の経営事象の総括を通じて経営や社会に便益を与える実務的な価値体系を考えると、単なる予算や計画というような未来ではない筈である。

それでは複式簿記に加える三次元の世界とはどのようなものなのか。三式簿記が第三の世界を加えたものとすれば、その世界におけるシステムとはどのようなものであろうか。三次元への複式簿記の拡張には、時間的次元である未来への拡張と微分的次元である加速度への拡張がある。単なる利益慣性といったものではなく、利益加速度（利力）の測定が未来の利益決定の本質であり、それが企業評価として、経営や財務など企業行動の理論を統合し発展させることに生かされる。利力のくり返しを高めたり、低めたり、消去したりというまさつ率についても考える必要がある。利力計算書等の計算体系を確実に構築し、広める必要がある。

三式簿記とは、簿記会計というソフトパワーの強化、拡張だと言える。ソフトパワーとは米国国防次官補のジョセフ・S・ナイが問題提起した多様で弾力的な見えない力で、ハードパワーである軍事力、政治力、経済力に働きかけて国際社会を真に強化発展させる力があるとする。簿記会計の三式簿記への発展が、企業というハードパワーに働きかけて真の経営力の発揮へとより高めることが期待される。